JRS2015 CTC トレーニングコースとちょっとした事件

小樽掖済会病院　平野雄士

本年の CT コロノグラフィートレーニングコースは、大会初日の 4 月 16 日木曜日に午前 10 時から開催された。JRS 企画なので技師には少しずつ馴染みが薄くなっているようだが、会場は盛会である。

最初にＷＳメーカー（東芝、ＡＺＥ，ＦＵＪＩ、アミン）から各ＷＳの特徴との開発状況の報告があった。FUJI は顔認識技術の応用について、AZE は統計的な CT ノイズ低減について、アミンからは ZIOATATION2 のポリープ自動計測やレポート機能の充実について、東芝は CT メーカーとして低被ばくの撮影手技から、本体内蔵機能での転送不要のデータ管理の簡便性など、それぞれに特徴のある報告があった。以前は各社の報告が重複している部分が多かったが、今回はメリハリが効いていて各社の力点の置き方が良くわかる内容であった。続いて国立がんセンターの北川まゆみ先生が『スクリーニング CTC における放射線技師の役割』を前処置から撮影、がんセンターでの一次読影までの状況を詳しく解説されていた。特に一次読影に関して、重要視された報告となっており、診療放射線技師は撮影法とともに読影に対する研鑽が重要であることが示唆された。

と、ここでちょっとした事件（？）が起きた。参加者からの質問で「専門用語ばかりで良くわからない、熟練者だけの集まりなら、

私には勉強にならないので帰る！」とご立腹なのである。この質問で堰を切ったかのように、別の方からも同様の意見があった。確かにタギングだ、クレンジングだ、VR だ、VGP だ、VE、VE+MPR そこに CT 言語の AIDR3D、AiSR、Veo, CT-AEC と 確かに略語と専門用語のオンパレードである。私自身もその専門用語にすっかり慣れてしまい、不自然に思わないようになっていた。トレーニングコースを始めた当初は用語集なるものをプリントに印刷し、配布していたものだが、ここ２，３年は配布していない。とはいえ、「ここは日本放射線医学会 JRS 主催の企画、放射線科医、診療放射線技師ならば、ある程度の略語は承知していていいはずだ。」と一瞬思った。しかし実態はそうではなかった。

今回で８回目となるこのトレーニングコースは JRS,JSRT 会員は参加無料ではあるが、非会員は２万円の参加費がかかる。そして３月上旬にインターネット上で募集を行い１日で WS 席の１５０席は予約が埋まってしまう状況である。そのような中で、今回の参加者の３分の２はなんと非会員であったらしい。CTC の普及に疑問を抱く方がいることは否めないが、実地医家の先生は非常に高い関心を持っており、所属学会でなくても熱心に勉強に来ているのである。今回、意見した先生は外科医であった。やはり思い込みは良くない。

会場は司会の飯沼先生と満崎先生の柔軟な対応で、発言した先生たちの了解を得ることができたようだが、その時は質疑応答時間が約一時間経過していた。

このドウシヨウモナイ空気の中で再開したプログラムの次の演者は私だった。演題名は『スクリーニング CTC における検査被ばくの低減化』、他科の先生にはまるで興味がないであろうファントム実験を中心にした被ばくの話だ。ちょっと雰囲気を戻したいときにこの内容は辛い！色んなことを諦めて、内容を理解してもらえるように、何度も言葉を言い換えて伝えたつもりだが、理解して頂けただろうか。時間的には更に超過し、ランチョンの時間に完全に入り込んでしまっていた。かなり冷や汗ものだった。

ランチョンセミナーではまつおかクリニックの松岡先生が、『実地臨床における CTC の使い方』、川崎医大の松本先生が『大腸 CT 検

査で見る大腸疾患』という演題内容で、興味深い臨床的なお話をされ、ようやくいい空気が戻ってきた。

午後のハンズオンセミナーでは飯沼先生、三宅先生、満崎先生を中心に 100 例近い症例の中からえりすぐりの症例を用いて、診断の基礎から実践までを効果的に学ぶプログラムが組まれていた。徹底的に解析を繰り返すことで、十分なトレーニングを積むことができたと思う。

なにはともあれ、今回は思いもよらぬ角度から、考えさせられたトレーニングコースだった。

さて、今年の JRC 、CTC 関連の一押しはこれです。

『東芝 WS の Vitrea に ZIO の大腸解析が搭載された！』

Good　job！